

黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.130

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

水稲農家として成長したい

一関市山目町

佐藤 一樹さん

両親がいない中での就農

穏やかな秋晴れの下、見渡す限り黄金色に染まった田んぼ。佐藤一樹さんは真剣な面持ちで、たわなに実った稲穂をコンバインで一心に刈り進めていく。

代々続く水稲農家に生まれた一樹さん。農繁期には田植えや稲刈りの手伝いに駆り出された。幼い頃、機械を操作する父の茂さんの膝の上に乗せてもらった記憶もある。いつしか将来は家を継ぐだろうと思うようになり、本格的に就農の準備を始めた高校3年生の時、突如として母の洋子さんを亡くしてしまう。「ここで立ち止まっている場合ではない」と前を向き準備を進めるも、今度は茂さんが入院。両親が不在の中卒業を迎え、同時に農業の世界に足を踏み入れることとなった。

たくさんの支援に感謝して

右も左も分からない中、農業の道を独り歩み出した一樹さんは、茂さんと交流があった近隣の農家の協力を得ながら、水稲栽培のいろはを教えてもらった。日常的な圃場の管理に、農業機械の操作。一つ一つ、できることを必死に積み上げていった。茂さんが退院してから、周囲の手を借りながらも親子二人三脚で農業に励む日々。就農から7年目となった今、「ようやく田んぼの管理を一人で行えるようになった」と胸を張る。茂さんから一樹さんへの経営移譲を行い、経営者としての勉強も加わった。自身の成長を振り返り、「たくさんの支援がありここまで来ることができた。今になって、両親の偉大さが身にしみる」と感謝と尊敬を口にす

地域と農業のために

J A 一関青年部中里支部や中里まちづくり協議会などの団体に所属し、地域を盛り上げる活動にも積極的に取り組んでいる。青年部では、龍澤寺こども園や中里小学校での食農教育をはじめ、他青年部との交流会にも参加。まちづくり協議会では、地域の風景を使ったカレンダーの作成や鶏舞の継承活動などに携わっている。

一樹さんは将来に向け、栽培面積の拡大を視野に入れている。「広く平坦な土地はスマート農業と相性がいい」自動操舵機能搭載の機械や、圃場の水管理ができるアプリケーションの導入を考えている。「面積を拡大するにはスマート農業が必要不可欠」と意気込む一樹さん。地域と農業の振興のため、前に進んでいく。



PROFILE

佐藤 一樹さん (24)

Kazuki Sato

一関市山目町

2001年一関市山目町生まれ。地元の高校を卒業した19年に就農。一関遊水地で「ひとめぼれ」の生産を手掛ける。水稻14畝。父、弟と3人暮らし。

